

『グローバル天理』第9号（通巻21号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 「地球温暖化の教理的解釈」

経済のグローバル化がもたらした貧富の差の拡大同様、温暖化という自然破壊においても、弱者と強者、被害者と加害者の構造が見られる。温暖化が続けば国土が水面下に消えるという島嶼国家も少なくない。天理教教理からすれば、この温暖化は本来あるべき生態系の火と水、そして人体におけるぬくみと水気のバランスの中で、それに対応するところの働きとしての理性と感性、理と情の働きがアンバランスになったことに、この温暖化の精神的原因であると考えられる。

荒川善廣 「「元の理」の探究（6）—混沌からの創造 [3]」

月日親神の泥海中における象徴的姿である大竜・大蛇は、他の実在する水棲動物の象徴とは違って、魂を意味するものではなく、根本的な二つ一つの働き(activity)を表している。この働きは、あまりに普遍すぎて、具体的な性格を欠いているため、この働きだけで具体的な人間世界を始めることはできない。そこで親神は、この普遍的な働きに道筋をつけ、具体的な性格をもつ八つの特定の働きを見いだされることになったのである。この十全の働きの協同によって、単なる可能性(potentialities)がはじめて現実的存在(actual entities)にもたらされるのである。

北詰洋一 「紛争回避のテクノロジー（6） 英国人の知恵の陥穽」

世界のもめ事をおさめる知恵と実績のある国は、英国だと思う。物事を客観的に、公平に判断する確かな目をもっており、力の行使を嫌う国民性だからだ。しかしことが自国の国益にかかると判断する目が濁ってくるし、宗教がかかわってくると、永続する解決策を見つけたことは難しいようだ。今回は英国のだす知恵の功罪を探ってみた。

末延岑生 「ことばと教育（6） ことばの元を探る [6]」

「八つのほこり」は、人間の成人に応じて現れる心情の自然発生的な順序に沿ったものと考え、人間の発達過程に合わせて四つの段階に分け、さらに“陽気ぐらし”への有りうべき方向を推理した。

第一段階の幼年期としての「惜しい」「欲しい」というほこりは、幼年期の自己中心的、生理的欲求レベルで、ある意味では生命維持のための本源でもある。我れさえ良くばという心を捨て、神一条の「潔い心」「与える」心の大切さを察することができる。

第二段階の少年期としての「憎い」「かわいい」は家族や隣人との対人関係における人見知り、第一反抗期に生じるほこりである。「悪を憎む」心はむしろ大切なものであり、愛情を他人に向けることの大切

さがわかる。

第三段階の青年期としての「恨み」「腹立ち」は、社会構成の中における社会的反抗期のほこりといえる。「許す」心、世の不正を許さない怒り、つまり「正義感」の必要性を暗示する。

第四段階の壮年期としての「欲」「高慢」は、複雑な成熟社会における、社会的欲求、物欲のほこりである。「欲求」の持つ生命力を「意欲」に変え、頑固に「信念」を貫く心が、陽気ぐらし文明の建設に向けての大きな力となる。

補足として、「うそ」と「追従(ついしよ)」「遠慮」は心とことばの不一致から生ずるほこりと思われる。コミュニケーションにおいて互いが心どおりのことばを使うことがいかに大切かを暗示している。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報 (20) 社会福祉とジェンダー [5]

先進国の中で日本は「赤ちゃん輸出国」という異例の存在である。国際養子縁組という一見美談に聞こえる制度にかんして、その問題点や日本の特異性について考察し、児童福祉の視点が何よりも重要であることを指摘する。

堀内みどり 「天理異文化伝道 (20) 天理教のコンゴ伝道 [19] —天理教憩の家診療所 [3]」

コンゴへの医療隊派遣は1976年3月の第13次隊が最後になった。いちれつきょうだいの教理の実践を理念としてきたが、10余年が経ち、医療隊のあり方に転換期がきていると考えられ、診療所は閉鎖。1977年の大統領暗殺を契機に宗教政策が変更となり、コンゴ国内では天理教を含む7宗派のみに布教認可が与えられた。天理教「憩の家」は新築されて、1979年6月16日コンゴ政府に移管された。

小滝 透 「天理比較神秘論への試み (21) 仏教と教祖 [2] —浄土教とのつながり」

教祖が幼い頃より最も慣れ親しんでいたのが浄土教である。その信仰は長じては「尼僧になりたい」と志すまでになってゆくが、五重相伝を受けたのを最後に全く影をひそめてしまう。今回は、その原因を当時の浄土教の状況とも絡めた形で推測してみた。

佐藤孝則 「生命論としてのエコロジー (7) 「遺伝子治療」の光と陰 [3]」

ヒトの命は受精卵が細胞核内で 23 組の染色体を整えた段階でこの世に誕生したと考えるべきである。受精卵が細胞分裂を繰り返して手足や目、耳を形成するまでを「胚」というが、当然、胚にも 人権があると私は考える。その人権を無視した「デザイナーチャイルド」の誕生は、親にとっては期待どおりの嬉しい“光”ではあるが、子どもにとっては辛い“陰”になることもある。むしろ、改変された遺伝子は子孫へと受け継がれ、予期せぬ悪影響を与える可能性のあることが問題である。

小林正佳 「「心」の学習」

子どもたちは周囲の人々との一貫した関わりを通して、コミュニケーションの規則性やルールを読み取り、コードを身につける。ところが、周囲の人々の表情や感情の発露、あるいはそこから発せられるメッセージが一貫性を欠いていたら、子どもたちの「心」の形成も不安定になってこざるを得ない。

この時生じるコミュニケーションの問題とは、決して個々のあいだに意思の伝達が成り立たないということだけにとどまらない。そもそも人間とは、周囲との交流を通してしか自分自身の「心」を築き上げてゆくことができないのだ。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（18） 医学研究の行方〔2〕」

近年よく知的財産ということが話題に上る。医学研究の場合、研究の歴史から、また関与する研究者の経歴、生命を守るという医学研究本来の目的から、研究成果を特許として主張する正当性があるのだろうか。